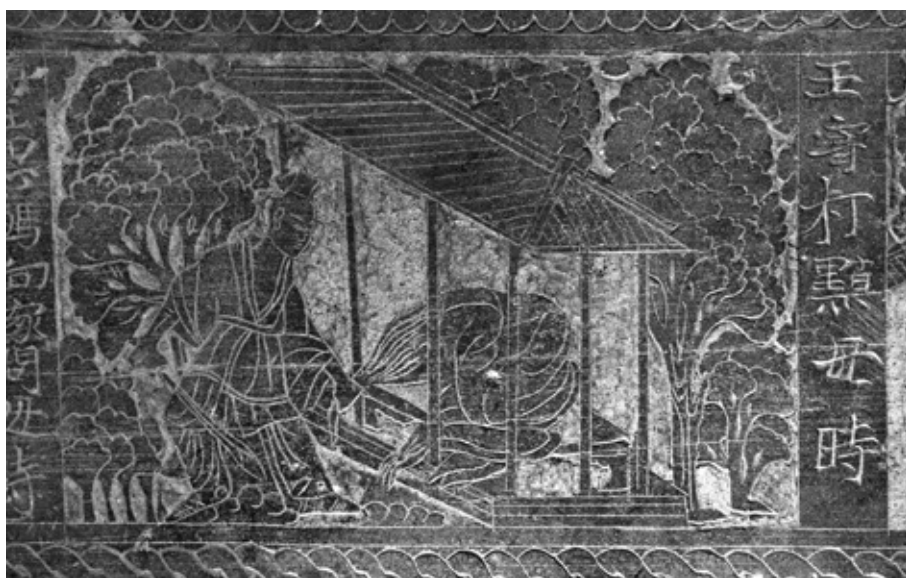
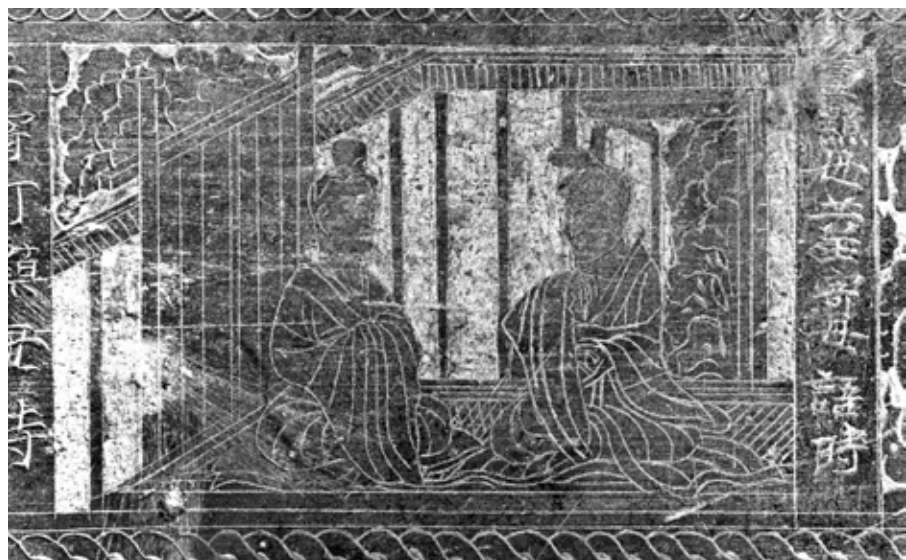




图版一 北朝艺术博物馆藏 郭巨董黯石脚 (郭巨A、B)



图版二 北朝艺术博物馆藏 郭巨董黯石脚 (郭巨C、D)



图版三 北朝艺术博物馆藏 郭巨董黯石脚 (董黯A、B)





图版四 北朝艺术博物馆藏 郭巨董黯石脚（董黯C、D）

# 北朝芸術博物館蔵の郭巨董黯石脚

—— 吳氏藏郭巨石脚との関連 ——

黒田 彰

## 一 郭巨董黯石脚の出現

## 二 郭巨の図像と郭巨の物語

## 三 官の黄金返還（大団円？）の問題

## 四 分財（プロローグ）との対応

## 五 丹書鉄券とは

## 六 郭巨物語の復元へ

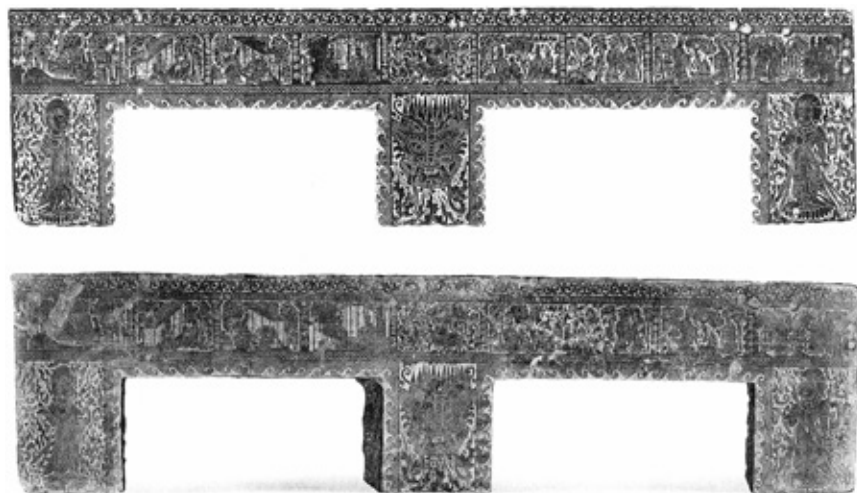
本年（二〇一八）年三月、山西省大同市を訪れ、新出の孝子伝図石脚を実見、撮影することが出来た（吳強華氏の教示による）。本石脚は、石脚——北魏時代の石棺床の脚部（前脚）——に描かれた孝子伝図として、極めて珍しい遺品で、世界的に吳氏藏郭巨石脚に次ぐ、二例目の孝子伝図石脚となる。小稿は、世界に先駆けて本石脚原石の孝子伝図の全貌を紹介しようとするもので（図版一—図版四、併せて石脚右半の郭巨図の内容を検討しようとする。本石脚は、右半に四面の郭巨図、左半に同じく四面の董黯図が描かれていて、各図には全て、図像内容を説明する題記が備わる、非常に貴重な孝子伝図遺品である。その郭巨図を通覧すると、前述吳氏藏郭巨石脚と深い関わりを有している（但し、吳氏藏郭巨石脚の方は、榜題題記の類が一切ない）。そこで、小稿では、吳氏藏郭巨石脚との関連を中心として、現存二十遺品の郭巨図との比較を同時、二つの石脚の郭巨図の研究史的位置付けを試みると同時に、現存郭巨物語のテキスト群との関係を確認することで、文献テキストによる物語研究の限界を具体的に明らかにし、図像を視野に入れた学際的研究をテキスト研究の将来的な研究法の一つとして提示してみたい（本石脚の董黯図については、拙稿「董黯覚書——董黯画卷の復元——」上下が近く公刊される）。

本年(二〇一八)正月、金石芸術博物館理事長呉強華氏より嬉しい年始メールが届いた。山西省大同市に、最近オープンした北朝芸術博物館という博物館がある。そこに極めて珍しい孝子伝図石脚が展示されている旨のメールである。そこで、本年三月、呉氏と共に北朝芸術博物館を訪れ、件の石脚を実見した。北朝芸術博物館の孝子伝図石脚の原石は、北魏時代の石棺床で、現存の遺品は、囲屏部分並びに、石闕を欠く(図一)。孝子伝図は、その前脚部分上部に描かれている(図二。上は拓本、下は原石)。前脚部分の法量は、縦五一・〇―三、横二〇三・四、厚一二・三糎である(石棺床(図一)の奥行は、一一〇・三一―一一糎)。前脚部分には、まず中央に畏獣(上。左向き)、饗饗(下。饗饗は、悪獣の名)が描かれ、右下と左下とは、二神像が描かれる。右の神像(左向き)の右上、左の神像(右向き)の左上の題記部分にそれぞれ、「金剛神」「金剛弥」と記されるのが、二神の名前であろう。金剛神の金剛は、梵語ヴァジラ vajra の訳で、二神が手にする金剛杵(独鈷杵)のことでもある。金剛神は、仏教の執金剛神、金剛力士を差し(金剛弥は未詳)、二神が蓮台に乗り、光背(頭光)を伴うらしいことなど、その二神は、仏教に由来する

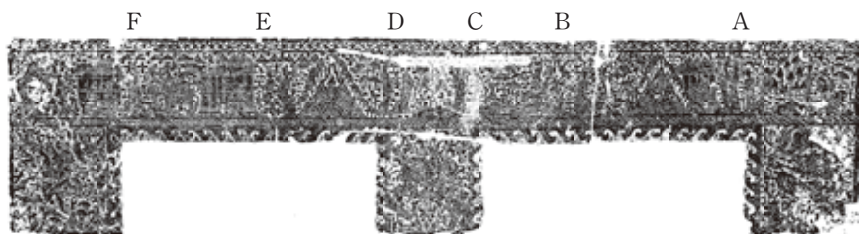
ものと見るのが妥当である。北魏時代に仏教の栄えていたことは無論、有名な事実だが、同時代の石棺床に仏教的要求が明確に指摘されることは、極めて珍しく、なお今後の課題とすべきである。小稿で扱おうとする孝子伝図は、本石脚の上部、饗饗の上に描かれた畏獣図の左右に描かれている。畏獣図の左右は、それぞれ四つに区切られるから、本石脚の上部は、真ん中の畏獣図を含めて、全九区画に分かれ、畏獣図の左右の八区画が孝子伝図で占められることになる。そして、後述するように、畏獣図の右は、郭巨、左は、董黯の物語が四場面ずつ展開されているのである。即ち、北朝芸術博物館蔵北魏石床(図一)の前脚部(図二)は、例えば陽明本孝子伝5郭巨、37董黯条の二つの孝子伝図を描いたもので、特にその前脚上部の図像の特徴を以って、小稿ではそれを郭巨董黯石脚と呼ぶことにする。さて、石床脚部に描かれた孝子伝図というものは、大変珍しい。通常石棺床の囲屏部分に描かれる孝子伝図が、その脚部にも描かれることを知ったのは、平成二十四(二〇一二)年三月、深圳博物館において、呉強華氏蔵北魏石床脚部に描かれた、見事な郭巨図を実見した時のことである(図三。呉氏蔵郭巨石脚と仮称する)。私は大きな驚きを覚え、その記憶が今に残っている(拙稿「郭巨図攷―呉強華氏蔵北魏石床脚部の孝子伝図について―」参照)。そ



図一 北朝芸術博物館蔵北魏石床



図二 北朝芸術博物館蔵郭巨董黯石脚（拓本、原石）

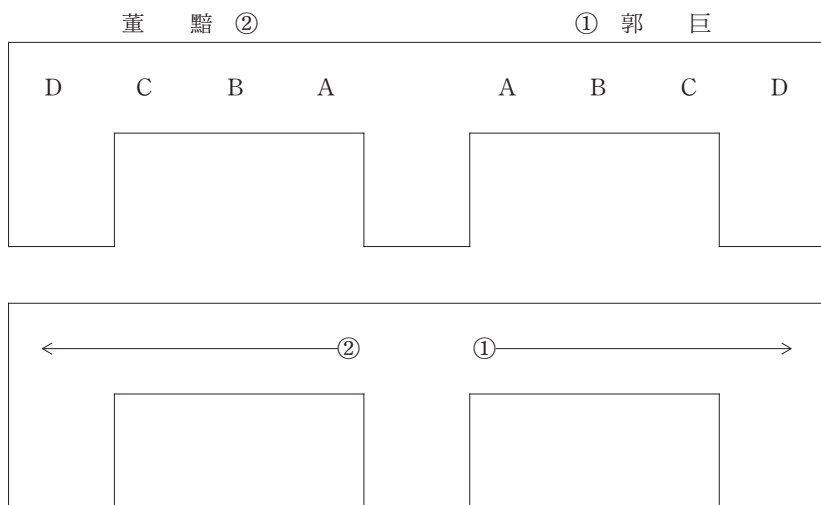


図三 吳氏藏北魏石床脚部（郭巨石脚）

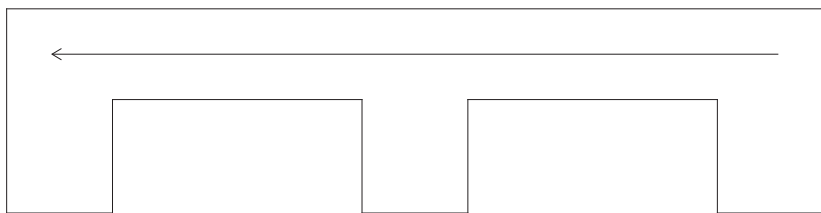
して、本石脚（北朝芸術博物館蔵郭巨董黯石脚）は、石床脚部（前脚部）に描かれた孝子伝図の二つ目の例となり、孝子伝図研究史において、吳氏蔵郭巨石脚と共に、石脚の孝子伝図という、新たな研究領域の存在を確定させる資料となる点を、ここに強調しておきたい。

巻頭の図版一―四は、本石脚上部に描かれた、八図の孝子伝図の原石写真を掲げたものである。図版一、二は、饗養図の右の郭巨の四図（左から）、図版三、四は、その左の董黯の四図（右から）となる。今、本石脚の郭巨（右）、董黯図（左）の配置を概念図化して示せば、図四上の如くである（A―Dは後述、孝子伝本文による、各図の順序を表わす）。図四上を見ると、本石脚の孝子伝図は、まず右の郭巨図A―Dが中心から右へ展開し、次いで左の董黯図A―Dが同じく中心から左へと展開していることが分かる。そのことをさらに概念図化したのが、図四下である。図四下は、新たに知られた北魏時代石脚における、孝子伝図の配列を示すものとして、極めて重要な例であるが、問題は、本石脚のその配列が、吳氏蔵郭巨石脚の配列とは全く異なっていることである。後述するように、吳氏蔵郭巨石脚（図三）には、A―F六図の郭巨図が描かれているが、吳氏蔵郭巨石脚のA―F六図は、全体の右から左へと展開するのである（図五）。石脚上の孝子伝図が纔か二例しか知





図四 郭巨董黯石脚の図像配置



図五 呉氏藏郭巨石脚の図像配置

られない現状にあつて、その図像配列が、中心から右と左へ（本石脚）、また、右から左へ（呉氏蔵郭巨石脚）という二通りあるという事実には、まずは注目すべく、この問題は、遺品例のさらなる出現を俟って、検討することが必要であろう。

北朝芸術博物館蔵郭巨董黯石脚の左に描かれるのは、陽明本孝子伝37董黯条に基づく、四つの董黯図である（図版三、四）。董黯図については、在米の三遺品が孝子伝図研究上、注目すべきものであることを、十六年程前の拙稿で指摘して以来（後掲拙稿Ⅰ）、十年を経た平成二十四（二〇一二）年、中国の呉氏蔵北魏石床の出現したことを皮切りに（同拙稿Ⅱ）、呉氏が蒐集に努められた五遺品を中心として、目下計十遺品の現存が知られるに到っている。その経過に関しては、以下の七拙稿において報告した通りである。

I 「董黯贅語——孝道と復讐（一）」<sup>⑥</sup>（拙著『孝子伝図の研究』Ⅱ—3）

II 「呉氏蔵北魏石床の孝子伝図について——陽明本孝子伝の引用——」

III 「董黯図攷——呉氏蔵北魏石床（二面）の孝子伝図について」<sup>⑦</sup>（『佛教大学文学部論集』100）

IV 「呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について——翟門生

石床の孝子伝図——」（『佛教大学文学部論集』101）

V 「董黯図攷（二）——呉氏蔵董黯石床の出現——」（『佛教大学文学部論集』102）

VI 「呉氏蔵新出董黯石床Bについて」<sup>⑧</sup>（『佛教大学文学部論集』103予定）

VII 「董黯覚書——董黯画卷の復元——」（近刊予定）

その経過を一言で纏めるならば、最初三場面しか確認出来なかった董黯の図像が、その後の呉氏蔵の遺品の出現によって十場面に増え、さらに本石脚の出現により現在、十二場面が確認される結果となった。本石脚は、董黯図の遺品として、最新の十場面の遺品に当たっており、何と言っても文字資料の題記の豊富な点、董黯図研究にとって、呉氏蔵のそれと共に、決定的に重要な資料を位置付けられる遺品であり、例えば北魏時代の董黯図制作の粉本として、董黯画卷の想定が必須のものとなることなどは、上記拙稿VIIにおいて具体的に述べた通りである。そこで、小稿では、本石脚の董黯図については、上記拙稿に譲ってこれ以上は述べず、図版三、四に該当する拓本の図像を紹介するに留めたい。そして、小稿は、本石脚に見える、もう一つの郭巨図に関し、呉氏蔵郭巨石脚との関連を考察する。図六、図七に掲げるのは、本石脚上部左に描かれた董黯図A、B及びC、Dの拓本図像である。A—Dの画面右に記された、



図六 郭巨董黯石脚（董黯A、B。拓本）



图七 郭巨董黯石脚（董黯C、D。拓本）



一行の題記を示せば、次の通りである。

A 董黯母共王寄母語時

B 王寄杙黯母時

C 黯在田心驚向家問母時

D 黯為母殺王寄黯辞墓代死

## 二

小稿の目的が、一つに北朝芸術博物館蔵郭巨董黯石脚を広く紹介することであり、特に本石脚右の郭巨図と呉氏蔵郭巨石脚との関連に触れようとすることは、前述の如くだが、そのことはまた、本石脚や呉氏蔵郭巨石脚の郭巨図が依拠した、孝子伝本文の検討を不可避のものとし、さらに二つの石脚以外の郭巨図との比較による位置付けが、どうしても必要となる。そこで、小稿は、本石脚を紹介すると共に、併せて、北魏時代の郭巨図の典拠とされた、孝子伝本文の形を考えることにより、本石脚や呉氏蔵郭巨石脚の図像が照射する、現行の孝子伝本文の持つ問題について、指摘してみたいと思うのである。まず小稿で扱う、諸図像の範囲と、その内容の認定に関して始めに説明し、その後具体的に問題へと入ってゆこう。

これまでに管見に入った、郭巨図の描かれる遺品を一覧として示せば、本石脚を含めて次のような二十遺品を上げ

ることが出来る（アルファベットは、連図の数）。

(1) 江蘇徐州仏山画像石墓

(2) 寧夏固原北魏墓漆棺画 ABC

(3) ミネアポリス美術館蔵北魏石棺

(4) 和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床 ABC

(5) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺 ABC

(6) C.T. Loo 旧蔵北魏石床 AB

(7) 洛陽古代芸術館蔵北魏石床

(8) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床

(9) 鄧鼎彩色画像甕

(10) 襄陽賈家冲画像甕墓

(11) 陝西歴史博物館蔵三彩四孝塔式缶

(12) 呉氏蔵北魏石床 AB

(13) 呉氏蔵北魏石床脚部（郭巨石脚） ABCDEF

(14) 呉氏蔵翟門生石床 AB

(15) ヴァージニア美術館蔵北魏石床

(16) 安陽固岸東魏石床 AB

(17) 襄陽清水溝 M1 南朝墓画像甕

(18) 襄陽柿庄 M15 南朝墓画像甕

(19) 呉氏蔵北魏崑崙石床 ABC

(20) 北朝芸術博物館蔵北魏石床脚部（本石脚） ABCD

一方、上記二十遺品の郭巨図は、郭巨の物語（孝子伝）か

ら帰納して、次の八つの場面に分けることが出来る（後述）。

- ①分財
- ②供養（プロローグ）
- ③道行
- ④穴掘り、黄金
- ⑤運搬
- ⑥供養（大団円1）
- ⑦官の黄金返還（大団円2）
- ⑧丑祠

表一は、上記の二十遺品に描かれた、郭巨図の場面を一覧としたものである（アラビア数字は、上記の遺品の番号である。アルファベットは、一遺品中の郭巨図が、複数に互る連図となっている場合、図像の順番に従ってA、B、C以下としたものである）。また、表二は、それぞれの遺品の有する場面の構成を、遺品毎に示して一覧に纏めたもので、上段が遺品、下段が場面構成である。さて、結論から先に言えば、本石脚は、②供養（プロローグ。A）、③道行（B）、④穴掘り、黄金（C）、⑦官の黄金返還（大団円2。D）の四場面を有することになるが、具体的なことは、後程述べよう。

郭巨図の図像内容を知るためには、その基となった孝子

伝テキストの郭巨物語を辿る必要がある<sup>⑩</sup>。最初にまず三つの孝子伝のその本文を紹介したい。日本にのみ伝存する完本の古孝子伝、陽明本、船橋本の5郭巨条の本文と、南斉の宋（宗）躬孝子伝の本文（逸文）を併せ示せば、次の通りである（○数字は、上記の場面番号を表わす。宋躬孝子伝は、初学記二十七へ太平御覧八一へに拠る）。

#### 陽明本

家範養母

郭巨者、河内人也。時年荒。夫妻昼夜勤作、以供養母。其婦忽然生一男子。便共議言、今養此兒、則廢母供事。仍掘地埋之。忽得金一釜。々々上題云、黄金一釜、天賜郭巨。於是遂致富貴、転孝蒸蒸。贊曰、孝子郭巨、純孝至真。夫妻同心、殺子養親。天賜黄金、遂感明神。善哉孝子、富貴榮身。

#### 船橋本

郭巨者、河内人也。父無母存。供養勤々。於年不登、而人庶飢困。爰婦生一男。巨云、若養之者、恐有老養之妨。使母抱兒、共行山中、掘地將埋兒。底金一釜、々々上題云、黄金一釜、天賜孝子郭巨。於是因兒獲金、不埋其兒。忽然得富貴、養母又不乏。天下聞之、俱譽孝道之至也。

#### 宋躬孝子伝

宋躬孝子伝曰、郭巨、河内温人也。妻生男。謀曰、

表一 郭巨図場面一覧

⑧丑祠	⑦官の黄金返還（大団円2）	⑥供養（大団円1）	⑤運搬	④穴掘り、黄金	③道行	②供養（ブローグ）	①分財	場面
16B	13F* 19C* 20D	3 4C 5C* 6B* 7* 11 12B* 13E* 16B* 19B	2B 4B 5B 13D* 19A*	1 2C 4A 5A 6A 8 9 10 12A 13B 14B 15 16A 17 18 20C	2B 13C 20B	2A (13A) 14A 20A	13A	遺品（アラビア数字）

\* 黄金なし

表二 郭巨図遺品の場面一覧

遺品	場面
(20) (19) (18) (17) (16) (15) (14) (13) (12) (11) (10) (9) (8) (7) (6) (5) (4) (3) (2) (1)	② ⑤ ④ ④ ④ ④ ② ① ④ ⑥ ④ ④ ④ ⑥ ④ ④ ④ ⑥ ② ④ ③ ⑥ ⑥ ④ ② ③ ④ ⑤ ③ ⑤ ⑤ ⑤ ⑤ ⑤ ⑤ ⑤ ⑤ ⑤ ③ ④ ④ ⑦ ⑧ ④ ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ④ ⑤ ⑥ ⑥ ⑥ ⑥ ⑥ ⑥ ⑥ ④ ⑤ ⑦

養子則不得營業、妨於供養。當殺而埋焉。鋪入地、有黃金一釜、上有鉄券曰、黃金一釜、賜孝子郭巨。

図八は、北朝芸術博物館蔵郭巨董黯石脚の郭巨図の第二、Bの拓本を示したものである。図八左の題記には、

郭巨共妻宜欲殺子

とあり、その題記の内容は、上掲三つの孝子伝の②供養（プロローグ）の一部に含まれているが、問題は、図八の図像の内容である。図八は、右に郭巨（左向きに立つ）、中に妻（右向きに立ち、左へ振り返る）、左に子供（右向きに立つ）を描き、背景に樹々、左下に山が見えるので、それは、明らかに③道行の場面を描いたものである（2B、13Cにも見える）。この場面に相当する文言も、今昔物語集巻九「震旦郭巨、孝老母得黄金釜」第一に、

父泣々妻言感シテ、妻ニ子ヲ令懷テ、我ハ鋤ヲ持テ、遙ニ深キ

山ニ行テ、既ニ子ヲ埋カメ為ニ、泣々土ヲ堀ル（鈴鹿本）

船橋本孝子伝に、

使ニ母抱レ兒、共行ニ山中、

とは見えるが、陽明本、宋躬孝子伝は、それを欠いていることに気付く（後述。また、図八において、子供が母に抱かれていない問題も、後程触れる）。即ち、陽明本等の脱落が疑われるのである。「深キ山」（今昔）、「山中」（船橋

本）へ赴いた郭巨であれば、黄金の釜を掘り出した郭巨及び、妻子は、それを伴って家に帰った筈である。しかし、その⑤運搬の場面をめぐる、孝子伝本文の状況は、一層奇怪である。

図九は、和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床（北魏正光五（五二四）年匡僧安墓誌を伴う）の右側板に描かれた郭巨図A、B、Cを掲げたものである。Aは、④穴掘り、黄金、Bは、⑤運搬、Cは、⑥供養（大団円）の場面を描く。ここで注目したいのが、図八のBの図柄で、Bは、例えば今昔物語集九・一に、

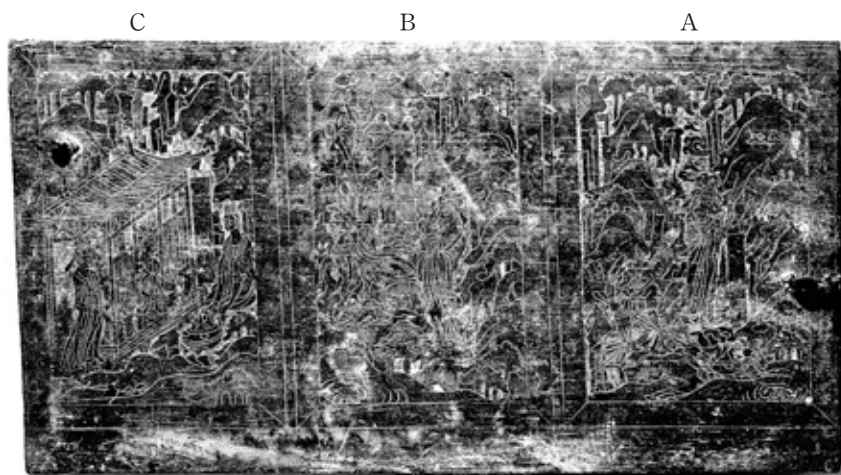
母ハ子ヲ懷キ、父ハ釜ヲ負テ家ニ還ヌ

と記されるものと正しく一致する（また、中山法華経寺本三教指帰上にも、「子具家カヘリ了」〔37ウ〕とある）。ところが、問題なのは、そのB即ち、⑤運搬の場面に該当する本文が、上引三つの孝子伝に全く見当たらないことである。⑤の場面は、図九Bのみならず、他の(2)、(5)、(13)、(19)などの遺品にも頻繁に描き出されているから、それに当たる本文が存在しなかったとは、一寸考えにくいであろう。さて、この事実は、北魏時代以前の孝子伝図である郭巨図の典拠として、孝子伝の本文を検討しようとする時、現行の例えは両孝子伝（また、宋躬のそれ）には、深刻な欠陥があるかも知れないことを示す、一つの兆候と捉えられる





図八 郭巨董黯石脚（郭巨B）



図九 和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床（郭巨A、B、C）



図十 郭巨董黯石脚（郭巨D）

（因みに、B即ち、⑤運搬を表わす本文は、他の孝子伝資料を通じても見出だすことが出来ない）。

描かれた図像があるのに、孝子伝本文がないという矛盾が、さらに顕著な形で露呈して来るのは、本石脚の郭巨図Dのケースである。図十は、郭巨董黯石脚の郭巨図Dの拓本を掲げたものである。図十は、画面左端の題記に、

巨為官問得金時

とあるので、その図像は、黄金の釜を掘り出した郭巨が、それを得た経緯を、官に問われている場面であることが分かる。図十は、まず中央に黄金の釜が据えられる（黄金の釜の上部に記された、三行分の題記に関しては、後で触れる）。その右に立つのが官司である（左向き）。彼が右手を上げるのは、券題によって黄金の釜を郭巨のものと認め、それを郭巨に返したことを表わしている。官司の背後（右）に、三人の侍者が立っているが（共に左向き）、官人であろう。黄金の釜の左に立つのは、郭巨、母（侍者かも知れない）、妻である（共に右向き）。さて、その題記と図像内容から考えて、図十は、⑦官の黄金返還（大団円2）の場面と断じて良いであろう。この場面のことは、例えば先にも引いた今昔物語集九・一に、

其ノ時ニ、国王此ノ事ヲ聞キ給テ、怪ラシク成シテ、郭巨ヲ召シテ被問ニ、郭巨前ノ事陳フ。国王聞キ驚給テ、釜ノ蓋ヲ召シテ見

給<sup>レ</sup>ミ、実<sup>ニ</sup>其ノ文顯也。国王此<sup>レ</sup>ヲ見給<sup>ミ</sup>、悲<sup>ミ</sup>貴<sup>ヒ</sup>、忽<sup>ニ</sup>国ノ重<sup>キ</sup>者ト用<sup>ラル</sup>。世ノ人亦、此<sup>レ</sup>ヲ聞<sup>テ</sup>、孝養<sup>ヲ</sup>貴<sup>キ</sup>事<sup>ム</sup>ナ<sup>ク</sup>讚<sup>ム</sup>メタル語<sup>リ</sup>伝<sup>ヘ</sup>トヤ

と明記されていることが、頗る興味深い。何故なら、この場面即ち、⑦官の黄金返還（大団円②）のことは上掲、三つの孝子伝の本文には、全く見当たらないからである。そして、図像（図十）があつて、それらに本文が見当たらないという事実は、両孝子伝等における、⑦官の黄金返還（大団円②）をめぐる、大きな本文の脱落というものを、動かないものとする。つまり北魏期以前の郭巨図は、両孝子伝の本文のみでは、十分に解釈することが出来ないことになる。ならば、例えば本石脚D（図十）等の背景にあつた、郭巨の物語の孝子伝本文というものは、一体どのような形をしていたのであろうか。

### 三

両孝子伝等には見当たらないが、本石脚の郭巨図D（図十）から考えれば、その依拠した孝子伝本文には、⑦官の黄金返還（大団円②）の件<sup>ぐわ</sup>りがあつた筈である。また、今昔物語集九・一の参照した孝子伝の郭巨条も、おそらく同じ形をしていたに違いない。そこで、古孝子伝の逸文を博搜すると、そのような形の孝子伝が、かつて存在していた

だろうことを示す、明徴がある。その一つが、劉向孝子図<sup>⑥</sup>の逸文である。その本文を示せば、次の通りである（太平御覽四一により、法苑珠林四十九（一）を参照する）。

劉向孝子図曰、郭巨河内温人。甚富。父没分<sup>レ</sup>財、二千萬<sup>ヲ</sup>為<sup>ニ</sup>兩分<sup>一</sup>。与<sup>ニ</sup>兩弟<sup>一</sup>、己独取<sup>レ</sup>母供養。寄<sup>ニ</sup>住<sup>一</sup>〔比〕隣有<sup>ニ</sup>凶宅無<sup>ニ</sup>人居者、共推与<sup>レ</sup>之居無<sup>ニ</sup>禍患<sup>一</sup>。妻産<sup>ニ</sup>男。慮<sup>ニ</sup>養<sup>レ</sup>之則妨<sup>ニ</sup>供養<sup>一</sup>。乃令<sup>ニ</sup>妻抱<sup>レ</sup>兒、欲<sup>ニ</sup>掘<sup>レ</sup>地埋<sup>ニ</sup>之於土中<sup>一</sup>。得<sup>ニ</sup>〔黄〕金一釜、〔金〕上有<sup>ニ</sup>鉄券<sup>一</sup>云、賜孝子郭巨。巨還<sup>ニ</sup>宅主<sup>一</sup>、宅主不<sup>ニ</sup>敢受<sup>一</sup>。遂以聞<sup>ニ</sup>官<sup>一</sup>、官依<sup>ニ</sup>券題<sup>一</sup>還<sup>ニ</sup>巨<sup>一</sup>。遂得<sup>ニ</sup>兼養<sup>一</sup>兒

劉向孝子図は前漢、劉向の作ではなく、六朝の仮託とすべきものだが、末尾⑦以下に、

巨還<sup>ニ</sup>宅主<sup>一</sup>、宅主不<sup>ニ</sup>敢受<sup>一</sup>。遂以聞<sup>ニ</sup>官<sup>一</sup>、官依<sup>ニ</sup>券題<sup>一</sup>還<sup>ニ</sup>巨<sup>一</sup>。遂得<sup>ニ</sup>兼養<sup>一</sup>兒

と見える所から、⑥供養（大団円①）で話を終える両孝子伝等に加えて、⑦官の黄金返還（大団円②）への展開を示す、孝子伝もかつて存在したことは、確かな事実と言えるだろう。すると、前述今昔物語集九・一の記述も、例えば岩波新日本古典文学大系34の注三六（四頁）に、「以下、王の対応は孝子伝（両孝子伝等）、注好選なし」と指摘される如く、両孝子伝に拠つたものとは考え難く、今昔や本石脚D（図十）などは、⑦官の黄金返還（大団円②）の記

述を持った上掲、劉向孝子図の<sup>(6)</sup>ような、物語の形の孝子伝に拠ったものと考えられるのである。このことに着目すると、劉向孝子図同様、⑦官の黄金返還（大団円②）に相当する文言を持つものが、さらに二点、敦煌出土の文献中に伝存していることに気付く。その一つは、以前に敦煌本孝子伝と誤解された類書、敦煌本事森であり、もう一つは、敦煌本句道興搜神記である。二書の本文を併せ示せば、次の通りである（敦煌本事森の本文は、P・二六二一により、句道興搜神記の本文は中村不折旧蔵本による）。

#### 敦煌本事森

郭巨、字文举、河内人也。家<sup>(貧)</sup>養<sup>(母)</sup>至孝。妻生<sup>(一)</sup>子、年三歲。巨謂妻曰、家貧如此。時歲飢虛、所<sup>(得)</sup>德充<sup>(食)</sup>、供<sup>(養)</sup>孝母、猶<sup>(不)</sup>充飽、更被<sup>(嬰)</sup>姦分<sup>(母)</sup>飲食。子可<sup>(再)</sup>有、母不可<sup>(得)</sup>。共<sup>(卿)</sup>埋<sup>(子)</sup>、以全<sup>(母)</sup>命。不妻不<sup>(敢)</sup>違、從<sup>(夫)</sup>之意。巨自執<sup>(鑿)</sup>、妻乃抱<sup>(兒)</sup>來入<sup>(後)</sup>園。令<sup>(妻)</sup>殺<sup>(子)</sup>、巨即掘<sup>(地)</sup>、纔深一丈尺、德<sup>(着)</sup>一鉄器。巨低<sup>(腰)</sup>顧視、乃見<sup>(一)</sup>釜、々中滿<sup>(盈)</sup>黄金。巨連招<sup>(妻)</sup>曰、抱<sup>(兒)</sup>則至。兒且<sup>(猶)</sup>活、妻不<sup>(忍)</sup>下<sup>(手)</sup>。夫謂<sup>(妻)</sup>曰、卿見<sup>(此)</sup>釜之金。其上有<sup>(一)</sup>鉄券<sup>(一)</sup>云、天帝賜<sup>(孝)</sup>子黄金。官不<sup>(得)</sup>奪、移不<sup>(許)</sup>侵。巨既得、驚怪不<sup>(以)</sup>。乃陳<sup>(於)</sup>懸、々已申<sup>(州)</sup>、々与<sup>(表)</sup>奏天子。々々不<sup>(詔)</sup>曰、金還<sup>(郭)</sup>巨、供<sup>(養)</sup>其母、乃表<sup>(門)</sup>

以<sup>(彰)</sup>孝德。（孝）子伝。

#### 句道興搜神記

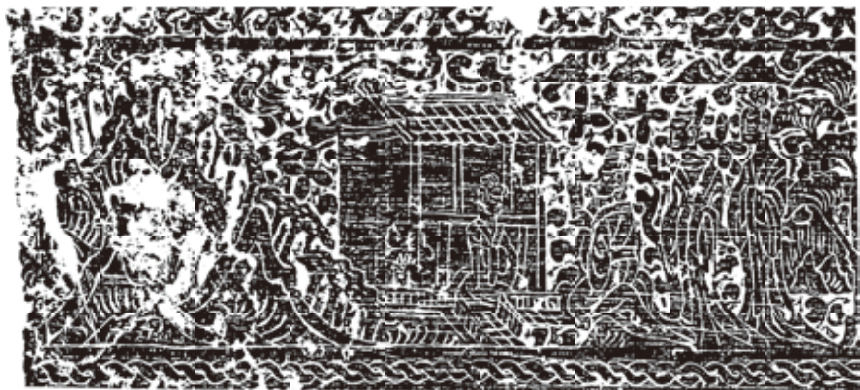
昔有<sup>(一)</sup>郭巨者、字文氣、河内人也。家貧、養<sup>(母)</sup>至孝。巨有<sup>(一)</sup>子、年始兩歲。巨語妻曰、今飢貧如此。老母年高、供<sup>(養)</sup>孝養、恐不<sup>(安)</sup>存。所<sup>(有)</sup>美味、每減<sup>(与)</sup>子。令<sup>(母)</sup>飢羸、乃由<sup>(此)</sup>小兒。兒可<sup>(再)</sup>有、母難<sup>(重)</sup>見。今共<sup>(卿)</sup>殺<sup>(子)</sup>、而存<sup>(母)</sup>命。妻從<sup>(夫)</sup>言、不<sup>(敢)</sup>有<sup>(違)</sup>。其妻抱<sup>(子)</sup>、往<sup>(向)</sup>後園樹下、欲致<sup>(子)</sup>命。巨身掘<sup>(地)</sup>、欲<sup>(擬)</sup>埋<sup>(之)</sup>。語<sup>(其)</sup>妻曰、子命<sup>(未)</sup>盡。妻不<sup>(忍)</sup>即害、必称<sup>(已)</sup>死。巨掘<sup>(地)</sup>得<sup>(一)</sup>尺、乃黄金一釜、々上有<sup>(銘)</sup>曰、天賜<sup>(孝)</sup>子之金。郭巨殺<sup>(子)</sup>存<sup>(母)</sup>命、遂賜<sup>(黄金)</sup>一釜。官不<sup>(得)</sup>奪、私不<sup>(得)</sup>取。見<sup>(金)</sup>驚怪、以呼<sup>(其)</sup>妻、々乃抱<sup>(子)</sup>往看。子得<sup>(平)</sup>存<sup>(未)</sup>死、妻乃喜悅。遂即將送<sup>(県)</sup>、々牒<sup>(上)</sup>州、々送上<sup>(表)</sup>、々上台省。天子下<sup>(制)</sup>、金還<sup>(郭)</sup>巨、供<sup>(養)</sup>其母、標<sup>(其)</sup>門閭、以立<sup>(孝)</sup>行、流<sup>(伝)</sup>万代。後漢人也

両書共それぞれ⑦以下に、

・巨既得、驚怪不<sup>(以)</sup>。乃陳<sup>(於)</sup>懸、々已申<sup>(州)</sup>、々与<sup>(表)</sup>奏天子。々々不<sup>(詔)</sup>曰、金還<sup>(郭)</sup>巨、供<sup>(養)</sup>其母、乃表<sup>(門)</sup>以<sup>(彰)</sup>孝德。（孝）子伝。（敦煌本事森）

・遂即將送<sup>(県)</sup>、々牒<sup>(上)</sup>州、々送上<sup>(表)</sup>、々上台省。天子下<sup>(制)</sup>、金還<sup>(郭)</sup>巨、供<sup>(養)</sup>其母、標<sup>(其)</sup>門閭、以立<sup>(孝)</sup>





図十一 吳氏藏郭巨石脚 (F)

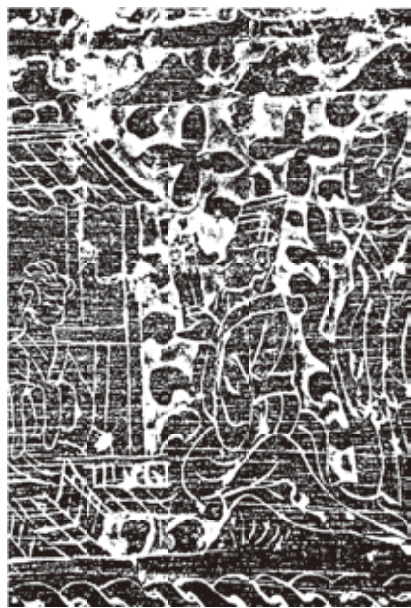
孝行、流<sub>二</sub>伝万代<sub>一</sub>。後漢人也（句道興搜神記）

など見え、特に敦煌本事森の末尾には、「孝」子伝」という出典注記がある所から、⑦官の黄金返還（大団円②）の記事を有する孝子伝が、唐代以前、敦煌にまで広く伝承されていたことが知られるであろう。しかし、一方で、⑦官の黄金返還（大団円②）のことを記す、文献資料というもの、劉向孝子図<sup>⑧</sup>を除けば、上掲二点の敦煌文書以外に管見に入らないことは、唐代以降、⑦の滅亡が急速に進んだことを示す徴証として、郭巨物語の成立と変貌を考える上で、注目すべき事柄と捉えられる。さらに、劉向孝子図<sup>⑧</sup>、敦煌本事森、句道興搜神記には前掲図八、つまり③道行を表わす、

- ・乃令<sub>二</sub>妻抱<sub>レ</sub>兒<sub>一</sub>（欲<sub>二</sub>掘<sub>レ</sub>地埋<sub>二</sub>之於土中<sub>一</sub>。劉向孝子図<sup>⑧</sup>）
- ・巨自執<sub>二</sub>鑿<sub>一</sub>、妻乃抱<sub>レ</sub>兒、来入<sub>二</sub>後園<sub>一</sub>（敦煌本事森）
- ・其妻抱<sub>レ</sub>子、往<sub>二</sub>向後園樹下<sub>一</sub>、欲<sub>二</sub>致<sub>二</sub>子命<sub>一</sub>（句道興搜神記）

という記述もあり、郭巨物語における本文展開の複雑さを窺わせるのである。<sup>⑩</sup>

そもそも郭巨図中の⑦官の黄金返還（大団円②）の場面の存在に、私が始めて気付いたのは、平成二十四（二〇一二）年三月、深圳博物館において<sup>⑪</sup>吳氏藏北魏石床（郭巨石脚）を目にした時のことである。その左半を眺めてゆく



図十二 呉氏蔵郭巨石脚（F。官人）

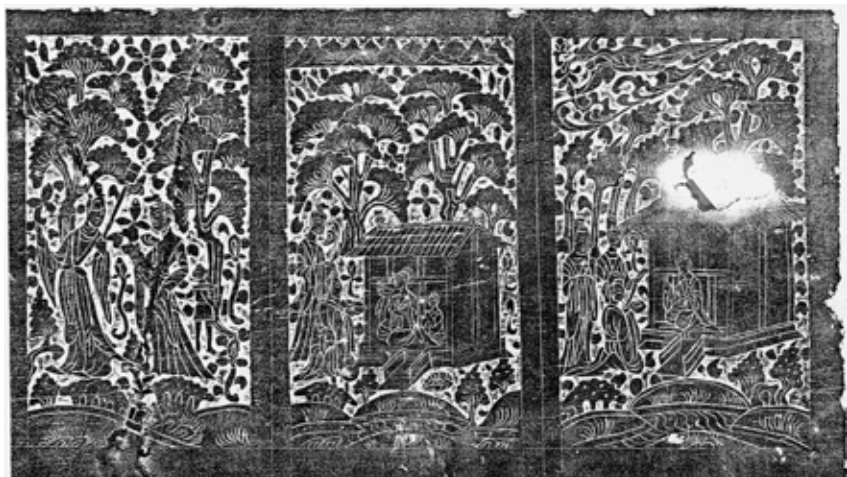
と、通常であれば、そこで図像が終わっている筈の⑥供養（大団円1）の場面（E）の後に、殆ど同じ構図をした、もう一場面が置かれていた。図十一は、そのFを示したものである。そして、F（図十一）の特徴として上げられるのが、E（⑥）には見えない、冠を被った官人の登場することである（図十二）。(13)のF（図十一）の内容を解釈するに際し、ヒントの一つとなったのは、その官人である。両孝子伝等に記述がなく、また、従来全く知られていない場面であったが、私は、劉向孝子図等<sup>(6)</sup>を参考に、それを⑥供養（大団円1。E）に続く、⑦官の黄金返還（大団円2）の場面であろうと考えた。その後、(13)の郭巨石脚C

（或いは、D）EFと瓜二つの三連図を有する、(19)呉氏蔵北魏崑崙石床と遭遇する。図十三は、(19)の正面右板、男性墓主像の右に描かれた郭巨図ABCを掲げたものである。<sup>(23)</sup>図十三（19）と(13)郭巨石脚の酷似振りには、驚くべきものがあり、共通の粉本の存在を確信させるが、そのことは、例えば図十一（13）と図十三C（19）とを見比べてみることによって、窺い知ることが出来よう（但し、(13)と(19)とは、場面の進行方向が逆のため、左右が反転している。また、当遺品〈(19)〉の郭巨図が、例えば④穴掘り、黄金の場面を持たず、後半の⑤運搬、⑥供養〈大団円1〉、⑦官の黄金返還〈大団円2〉の三場面だけで構成されるのは、聊か奇妙な観があり、或いは、それに対応する例えば正面左板、女性墓主像の左に描かれる、①―④を内容とする前半の、かつて存在した可能性が高いことについては、別途考えてみたい）。取り分け図十三Cにも、一人の官人の像が見えることは、北魏時代に郭巨図の⑦官の黄金返還（大団円2）の場面が或る程度、広がっていたことを示す一証と捉えられる。かくして郭巨図における、⑦の場面の実在は、二例に増えた訳だが、困ったことに、図十一（13）、図十三（19）には榜題、題記の類が全く見当たらず、両図が⑦官の黄金返還（大団円2）であることの、文字による徴証は、皆無という状況に陥った。文字資料に較べ、解釈の幅

A

B

C



図十三 吳氏藏北魏崑崙石床（郭巨）

の広い図像の場合、その解釈を特定することは、中々難しい。だから、例えば私が、両図を⑦の場面と確信出来たにせよ、そのこと自体を客観的に眺めるならば、それは、飽くまで一つの推測、仮説に過ぎないだろう。ところが、そのような状況において、この度、両図に次ぐ、三例目の⑦官の黄金返還（大団円2）の場面となる、画期的な図像が出現した。その図像こそが、図十（20）に外ならない。図十が何故、画期的かという点、画面の左に、

巨為<sub>レ</sub>官問<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>金時（巨、官の為に金を得るを問わる時）

なる題記を有するからである。即ち、本題記の出現によって、図十の図柄が⑦官の黄金返還（大団円2）の場面と確定されることになり、北魏時代の郭巨図に、⑦の場面の具わっていたことが、もはや動かし様のない事実となるだろう。換言すれば、これまで仮説に過ぎなかった、図十一（13）や図十三（19）をめぐる、⑦の場面としての推測が、図十（20）の出現により、漸く裏付けられたことになる。孝子伝図研究史、特に郭巨図の研究史において、⑦官の黄金返還（大団円2）の存在が、確定されたことの学術的意義は、極めて大きい。

ところで、図十を見ると、画面の中央、黄金の釜の上に、三行に互る題記様の文字が刻される（図十四）。その文言



図十四 郭巨図 (D. 黄金の釜)

を示せば、次の通りである。

天賜黄金

壺釜官不

奪民不取

これは、一体何であろうか。その文言は、例えば敦煌本事森などに、郭巨の掘り出した黄金の釜の、

其上有<sub>二</sub>鉄券<sub>一</sub>云

以下に記される文言と一致する。鉄券は後述、丹書鉄券などと呼ばれる、古代中国以来の或る種の契約文書の称である(丹書は、丹砂を用いて填字されたことから言う)。

翻つて、図十二、郭巨石脚Fの官人像を見ると、その官人は、二枚の短冊様のものを両手で捧げ持っている。さらにその短冊様のものの一枚は、実は、郭巨石脚B即ち、④穴掘り、黄金の場面に見える、黄金の釜の上に添えられた、鉄券であろうと考えられる(図十五)。そして、上掲敦煌本事森、句道興搜神記には、

・其上有<sub>二</sub>鉄券<sub>一</sub>云、天帝賜<sub>二</sub>孝子黄金<sub>一</sub>。官不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>奪、移不<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>侵(敦煌本事森)

・々上有<sub>レ</sub>銘曰、天賜<sub>二</sub>孝子之金<sub>一</sub>。郭巨殺<sub>二</sub>子存<sub>一</sub>母命、遂賜<sub>二</sub>黄金一釜<sub>一</sub>。官不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>奪、私不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>取(句道興搜神記)

とあるから、「天帝賜<sub>二</sub>孝子黄金<sub>一</sub>」(敦煌本事森)以下の句は、その鉄券に書かれていた文言であったことが知られる。即ち、本石脚郭巨図Dの、黄金の釜の上に見える題記様の句は(図十四)、郭巨の掘り出した黄金の釜に添えられていた、鉄券(敦煌本事森)の文言だったのである。郭巨図にはもう一例、題記に当句を記すものがある。それが(2)寧夏固原北魏墓漆棺画Cである(図十六。題記「官不<sub>レ</sub>徳<sub>レ</sub>脱<sub>レ</sub>私<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>徳<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>」)。与は、取る意)。図十五は、④穴掘り、黄金の場面を描いたもので、その題記、

官不<sub>レ</sub>徳<sub>レ</sub>脱<sub>レ</sub>私<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>徳<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>

は、明らかに当句の一部であり(「天賜<sub>(黄金)</sub>皇<sub>(釜)</sub>今<sub>(釜)</sub>一父」は、B





図十五 吳氏藏郭巨石脚（B。鉄券）

〈③道行〉の題記に見える）、図十六において、当題記が黄金の釜の左上に記されるのも、それが黄金の釜に添えられた、文言であることを表わすものに違いない。(2)は、北魏太和（四七七―九）頃の制作とされる優品であるのみならず、棺側左幫の上欄に、八場面にも及ぶ舜図を擁するなど、従来の孝子伝図の見方を一変させるに到った、最重要遺品の一つであり、その郭巨図中に当句が見えるという事実は（図十六）、北魏時代の孝子伝テキストに当句が存在したことの、強力な証左と言えるであろう。とは言え、現存孝子伝テキストを眺めても、両孝子伝以下、当句を載せ

るそれは、極めて数が限られる。後世のものとなるが、当句を載せる、管見に入った資料として唐、李瀚撰の蒙求①「郭巨将坑」句注と元、郭居敬撰の全相二十四孝詩選とを紹介しておく（蒙求是、故宫博物院本の古注、全相二十四孝詩選は、身延文庫本17に拠る）。

#### ・古注蒙求

後漢郭巨家貧養老母。妻生一子。三歳。母常減食与之。巨謂妻曰、貧乏不能供給。共汝埋之。々々可有。母不可再得。妻不敢違。巨遂掘坑二尺余、忽見黄金一釜。釜上文云、天賜孝子郭巨。官不得奪、人不得取。出孝子伝。

#### ・全相二十四孝詩選

##### 郭巨

貧乏思供給。埋兒願母有。  
黄金天所賜。光彩照寒門。  
郭巨字文举。妻産一子。三歳。母常減食与之。巨謂曰、貧乏不能供給。共汝埋之。々々可有。母不可再得。遂掘坑三尺余、得黄金一釜。上云、天賜郭巨。官不得奪、民不得取。

全相二十四孝詩選は、蒙求の系統である。さて、敦煌本事森、蒙求是、それぞれ末尾に、「孝」子伝、「出孝子伝」などと出典注記があるから、唐代以前に、当句を具える孝



図十六 寧夏固原北魏墓漆棺画（郭巨C）

子伝テキストのあったことは、疑う余地がない（おそらく共に、逸書類林を出典とする）。句道興搜神記なども、出典を記さないが、孝子伝を引いたものであろう<sup>②</sup>。そして、図十四、図十六の題記が、孝子伝所載の当句に拠ったものであることは、もはや明らかである。このことから、図十四（20 D）の、

<sup>a</sup>天賜<sup>a</sup>黄金<sup>a</sup>老釜<sup>a</sup>。官不<sup>b</sup>得<sup>c</sup>奪<sup>c</sup>、民不<sup>c</sup>得<sup>c</sup>取<sup>c</sup>

は、例えば句道興搜神記④における、

々上有<sup>⑤</sup>銘曰、天……賜<sup>a</sup>黄金一釜<sup>a</sup>。官不<sup>b</sup>得<sup>c</sup>奪<sup>c</sup>、私不<sup>c</sup>得<sup>c</sup>取<sup>c</sup>

の、a b cを引いたものであり（句道興搜神記のb cから、「得」字が省略される。同c一字目「私」は、敦煌本北堂書鈔体甲及び、二十四孝系の全相二十四孝詩選竜大甲、乙本と日記故事、「民」に作る）、また、図十六（2 C）の、  
<sup>b</sup>官不<sup>b</sup>得<sup>c</sup>奪<sup>c</sup>、私不<sup>c</sup>得<sup>c</sup>取<sup>c</sup>  
は、そのb cを引いたものであることが知られる（cの四字目を「与」に作る文献は、管見に入らない）。

#### 四

図十四（20 D）や図十六（2 C）に記される、当句のb

c、  
<sup>b</sup>官不<sup>b</sup>得<sup>c</sup>奪<sup>c</sup>、私不<sup>c</sup>得<sup>c</sup>取<sup>c</sup>（句道興搜神記）

が両孝子伝以下、a「天……賜黄金一釜」のみを留め、多くの資料から姿を消してしまう事象は、何故起きたのであろうか。そこには、郭巨の掘り出した黄金の釜を、役所も私人も郭巨から奪えないとする、天の明言をものはや不要とするような、何らかの事情が働いていたに違いない。一方、公も私も、郭巨から黄金を取り上げてはならないとする、b cの天言にも不審が残る。そもそも郭巨が自分の土地や山から、黄金の釜を掘り出したのであれば、a「天……賜黄金一釜」の天言で事は足り、b c、殊にc（私、民、人）は、不必要である。にも関わらず、何故、天言がb c（公私）を上げる必要があったのか、その理由を考えてゆくと、興味深い資料が存していたことに気付く。それが前掲の劉向孝子図①、郭巨の分財を述べる件りである。加えて、郭巨の分財については、もう一点、晋、干宝撰とされる、二十卷本搜神記十一にも、同じ話が見えるので、まずその本文を紹介すれば、次の通りである。

郭巨隆慮人也。一云、河内温人。兄弟三人、早喪父。礼畢、二弟求分。以錢二千万、二弟各取一千万、巨独与母居客舍。夫婦傭賃、以給公養。居有頃、妻産男。巨念、与兒妨事親、一也。老人得食、喜分兒孫、減饌、二也。乃於野鑿地、欲埋兒、得石蓋、下有黄金一釜。中有丹書、曰、孝子郭巨、黄

金一釜、以用賜汝。於是名振天下。さて、劉向孝子図、二十卷本搜神記の①を見ると、

・郭巨河内温人。甚富。父没分財、二千万為兩分。与兩弟、己独取母供養。寄住〔比〕隣有凶宅無人居者、共推与之居無禍患（劉向孝子図）

・郭巨隆慮人也。一云、河内温人。兄弟三人、早喪父。礼畢、二弟求分。以錢二千万、二弟各取一千万、巨独与母居客舍（搜神記）

とあって、両書は、全く同じ内容の話であることが分かる。二十卷本搜神記は、おそらく劉向孝子図と源を等しくする、晋代以前の孝子伝を引いたものと思われる。通常、郭巨物語を捉える前提として、郭巨は「家貧」（陽明本）と理解して来た、私達を仰天させるのは、郭巨が実は大金持だったとされることであろう（郭巨……甚富（劉向孝子図））。金持だった郭巨が、貧乏になってしまった訳は、郭巨には二人の弟がいて、父の没後、その二人の弟が財産の分与を求めたためである。そこで、郭巨は、財産を二分して家諸共兩弟に与え、自らは母親のみを引き取った。だから、郭巨は、無一文となってしまうたのである。郭巨が住む家も失ってしまったことは、「凶宅」（縁起の悪い家）に仮住まいしたとか（劉向孝子図）、「客舍」（借家）に移ったとか（搜神記）、述べられていることから分かる。郭巨が母親

を引き取ったのは無論、彼が孝子だったからで、それに対し、父の没後に彼の家で起きたことは、分財と呼ばれる出来事だった。分財は、家の力を弱くするため、漢代では不孝とされた行為に当たる。郭巨が財産の三分の一、家などを取らず、結果的に貧乏となってしまうことは、分財に与って孝道に背くことを、恐れたためと思われる。さて、図十四(20D)や図十六(2C)に見える、句道興搜神記の、

官<sup>b</sup>不<sup>c</sup>得<sup>c</sup>奪、私<sup>c</sup>不<sup>c</sup>得<sup>c</sup>取

に当たるb、cは、分財の結果、家も土地も持たない郭巨が掘り出した、黄金の釜の所有権を判定する天言だった。つまり郭巨は、自分のものでもない、人様の土地から黄金の釜を掘り出してしまった訳で、それが郭巨のものである保証は、何処にもないことになる。だからこそ、郭巨がそれを手に入れるには、まず「黄金一釜、天賜<sup>c</sup>郭巨」(陽明本)という天言aが、必須だったのである。このことから、

天……賜<sup>a</sup>黄金一釜。官<sup>b</sup>不<sup>c</sup>得<sup>c</sup>奪、私<sup>c</sup>不<sup>c</sup>得<sup>c</sup>取(句道興搜神記)

とされる天言のb、cは、郭巨が人の土地から、黄金の釜を掘り出したことを前提とし、cの私(民、人)は、その地主、bの官は、天子を頂点とする、公の裁定機関を差す

もので、当句abcは、郭巨が人の土地から掘り出した、黄金の釜の帰属をめぐる、言わば訴訟沙汰を、予め封殺するための天言であったことが知られるのである。そして、郭巨物語の結末に当句abcを置くならば、その郭巨物語は、彼が人様の土地から、黄金の釜を掘り出したことを、明記する内容を持つものでなければならぬ。そして、そのような形の物語こそが、郭巨の物語の原初形態であったと考えられる。何故なら、同居共財を是とし、異居異財即ち、分財を不孝と捉える孝思想は、漢代殊に後漢に盛んとなったイデオロギーで、兄弟関係(悌)をも包含していたが、孝は、次第に親子関係を中心とする方向へとシフトし、やがて変貌、衰退するからである。例えば荊樹連陰の故事として知られる、分財をめぐる田真の物語は、二十四孝(日記故事系欠)に残り、日本の御伽草子『二十四孝』にも採られているが、かつて大島建彦氏が、「ただし、この一編は直接に孝行に関するものとはいえない」などと評されたように、分財と孝の関連は、とても理解しにくいのである。このことから、郭巨の物語は当初、①分財というプロローグを持つものであったが、後に分財と孝の関係が分かりにくくなったため、やがて省略されるに到ったものと思われる。同じ理由から、その逆の過程は考え難い。一方、①分財のプロローグに対応するのが、大団円に当たる、⑦



官の黄金返還のプロット及び、⑦を導く前述、鉄券丹書の銘文a、b、cであった。そして、①分財のプロットが無くなると、まず⑦官の黄金返還が余分となつて省略され、次いで、⑦に纏わる、当句のb、cの部分的な削除へ進んだものと推測される。両孝子伝などに見られる、よく知られた型の郭巨物語の誕生である。そこでは、郭巨は、一般的に「家貧」と設定されるだけで、郭巨の家や土地が誰のものか、などといった事柄は、全く問題にされず、黄金の釜を掘り出した地点即ち、子供を埋めようと穴を掘った場所も、さしたる問題とはならなくなってしまう。だから、その場所は、本来は、「凶宅」の「地」(劉向孝子図<sup>⑬</sup>)とされたものが、面白いことに「後園」(裏庭。事森等)とか、「田中」(⑪)、「野」(二十卷本搜神記)とか、最終的に「山中」(船橋本)へと変化する。要するに、その土地の持主が問題とならない以上、黄金の釜の所有権をめぐる天言は、郭巨に対するa「天……賜黄金一釜」のみで、十分に事足りたのである。

北魏時代以前の郭巨物語を、鉄券に書かれた文言(図十四<sup>⑫</sup>、図十六<sup>⑬</sup>)などから、このように考証、再建してみる時、改めて内容を解釈し直してみたい図像がある。それは、(13)呉氏藏北魏石床脚部(郭巨石脚)Aの図像である。図十七は、その郭巨石脚Aの図像を掲げたものである。併

せて、図十八に、本石脚Aをも掲げておきたい(題記「郭巨共婦供養母時」)。まず図十八は、画面右に、跪く郭巨夫婦(共に左向き。郭巨は、左手に食器を捧げる)、画面左に、坐して左腕に子供を抱く母を描く(母は右向き、子供は左向き)。本図は、題記から明らかなように、②供養(プロローグ)の場面である。さて、図十七を見ると、画面右に、一頭の馬(左向き)、それを曳く郭巨(左向きに立つ)、画面中央に、両手で食器を捧げる妻(右向きに立つ)、画面左に、一軒の家があつて、その中に坐する母と子供(共に右向き)が描かれる。私は、かつて当図を、画面左の母と子供から、②供養(プロローグ)の場面であろうと考えた<sup>⑭</sup>。そのことは、当図(図十七)及び、図十八の左における、母と子供が共通していることから推測される(図十七と図十八の子供のことは、後述に従う)。ところが、陽明本を用いたその解釈では、図十七に描かれる、画面左、家の中の母に対し拱手して立つ、二人の男性(共に左向き。冠から男性であることが分かる)とか、画面右端の馬などが全く説明出来ないものである(旧稿では、二人の右の童子と共に、侍者であろうと考えた)。しかし、二十卷本搜神記や劉向孝子図<sup>⑮</sup>を参考に、郭巨物語が単なる供養<sup>⑯</sup>(②)から始まるのでなく、分財<sup>⑰</sup>(①)から始まるものと考えると、図十七(13)Aは、綺麗に解釈することが出



图十七 吳氏藏郭巨石脚（A）



图十八 郭巨董黯石脚（郭巨A）



図十九 郭巨董黯石脚（郭巨C）

来る。即ち、馬は、母を伴う郭巨の引つ越しを表わすものであり、二人の男性は、郭巨の両弟で、両弟が母に別れを告げる場面を描いたものであろう（童子は、両弟の侍者だろう）。北魏の図像から再建される郭巨物語は、②供養（プロローグ）に始まり、⑥供養（大団円1）に終わる、一見シンブルな両孝子伝等の形に較べ、その②に先立つ、もう一つのプロローグ即ち、①分財から始まって、さらに⑥へ後続する、もう一つの大団円即ち、⑦官の黄金返還（大団円2）で終わるという、より複雑で大掛かりな話柄展開を見せる物語である。そして、そのような形の郭巨物語へと、私達を導いたのが、図十（20D）、図十六（2C）であり、また、図十一（13F）、図十三（19C）に外ならないことを、改めて確認しておきたい。取り分け13呉氏蔵郭巨石脚は、そのFに⑦を具えることもさりながら（図十一）、目下唯一①分財の場面を有する遺品として、今後の孝子伝図研究——郭巨図の研究に不可欠の資料であり、将来出現するであろう郭巨図との比較対照が、切に俟たれるのである。

図十九は、(20)北朝芸術博物館蔵郭巨董黯石脚の郭巨図Cを示したものである。左端の題記には、

巨共妻壻子得金釜

と刻されるから、本図は、郭巨物語における④穴掘り、黄

金の場面を描いたものであることが確かである。画面右、

左手に子供を抱き、右手でそれを指差すのが妻である（共に左向き）。画面左、右手に甬すきを突き、左手で妻に子供への何かの指示を送っているのが郭巨である。二人の間に土盛りが出来ているのは、郭巨が掘り出した土だろう。その土盛りの上に描かれるのが、題記に言う「金一釜」であるところが、それをよく見てみると、不審なことに、続く郭巨図D（図十）に描かれた黄金の釜とは、形が全く異なっていることに気付く。即ち、図十（20D）の黄金の釜は、④の場面で妻々見掛ける、丸い釜（但し、周囲への出つ張りはない）の形をしているのに対し、本図（20C）のそれは、恰も瓦かわらのような形をしている。これは一体何であろうか。また、図十（20D）に描かれた、黄金の釜との関係は、どうなっているのだろうか。

## 五

今昔物語集九・一に、

黄金ニ釜有リ、蓋有リ。其ノ蓋ヲ開見レ、釜ノ上ニ題テ文有リ。

其ノ文ニ云々、黄金ノ一ノ釜、天孝子郭巨ニ賜フト有リ……国

王聞驚給テ、釜ノ蓋ヲ召シテ見給フニ

と言う、謎の部分があつて、その「蓋有リ」に対し、例えば岩波日本古典文学大系（旧大系）23の頭注二三（189頁）

が、

蓋とは、どの類話にも見えない

と指摘しているように、私共研究者を悩ませて来た部分である。さて、今昔のその部分は前掲、二十卷本搜神記の④に、

得石蓋、下有黄金一釜。中有丹書、曰、孝子郭巨、黄金一釜、以用賜汝

と記される部分と、明らかに関連がある。問題は、その「石蓋」（搜神記）、「蓋」（今昔）とは、何なのかということであり、また、それと「丹書」、「黄金一釜」（搜神記）との関係は、一体どうなっているのかということである。この問題には長らく私も苦しめられた。ところが、最近、何月馨氏による「隋唐墓葬出土鉄券考」なる論攷を目にするに及んで（以下、何論文と呼ぶ）、それが氷解した。何論文は、一九二、三〇年代に引き続き、近時陸続と出土する隋唐代の随葬鉄券を博搜、その実態を報告すると同時に、考察を廻らされた労作である。その学術的価値はまず、これまで殆ど実態の知られなかった、随葬鉄券というものが上げられる。図二十は唐、劉自政墓出土の石函と鉄券を示したものである（何氏撮影。函内の鉄券は破碎している）。石函には蓋があつて、その表面には、「鉄券函」（図





図二十 石函、鉄券

二十)、「券函」などの刻銘がある。これは、驚くべき事実と言うべく、漸くここに、二十

十卷本搜神記の、「得<sub>二</sub>石蓋<sub>一</sub>……中有<sub>二</sub>丹書<sub>一</sub>」の文意が判明する(丹書は、鉄券のこと)。即ち、郭巨が穴を掘っているところ、甬の先が石函の蓋に当たり、その蓋を開けると、中に鉄券(丹書)が入っていた、ということである。黄金

の釜は、石函の下に埋まっていた。そして、今昔の場合も、その意味に解釈すべきことは、言うまでもない。何氏が報告された、図二十などの石函は、唐代以降の遺品である。それに対し、上掲搜神記の記述は、南北朝期或いは、漢代にまで溯る、鉄券の保管法としての石函の実態をめぐる、起源の一つを示す文献資料として、非常に貴重な用例と考えられる。

鉄券は、丹書、丹書鉄券、鉄券丹書などとも称される、或る種の契約文書である。今、鉄券を、次の三つに分ける。

### 1 伝世鉄券

### 2 買地鉄券

### 3 随葬鉄券

何論文に報告されたのが、2 買地鉄券の一類として派生した、3 随葬鉄券である。

鉄券の起りは、漢書一下高帝紀一下に、

(高祖) 又与<sub>二</sub>功臣<sub>一</sub>剖<sub>レ</sub>符作<sub>レ</sub>誓、丹書鉄契、金匱石室藏<sub>二</sub>之宗廟<sub>一</sub>

と記された、前漢劉邦の事績に始まることがよく知られており、その「丹書鉄契」は、後漢書二十列伝十の蔡邕伝に、(高祖) 死則疇<sub>二</sub>其爵邑<sub>一</sub>、世無<sub>二</sub>絶嗣<sub>一</sub>、丹書鉄券、伝<sub>二</sub>於無窮<sub>一</sub>

と、「丹書鉄券」と言い換えられていることもまた、周知の事実である。かつて仁井田陞氏は、それを邦国の約、封爵の誓を記すものと規定して、

鉄券は、一種の割符であつて、一半は功臣に頒賜し、一半は宗廟に保存し、事あるときはつき合はせの用に供した

と述べた上で、「原物のまゝ後世まで伝存した」、1 伝世鉄券として唐昭宗、乾寧四(八九七)年の錢鏐鉄券を詳しく紹介された<sup>⑤</sup>。錢鏐鉄券は、数奇な伝世経路を辿って現在、中国国家博物館の所蔵に帰している。錢鏐鉄券は、最古且つ、唯一の伝世鉄券と言うべく、明代に作られた四(五)つの伝世鉄券は、錢鏐鉄券の模造である<sup>⑥</sup>。錢鏐鉄券は、縦

二九・八糶、横五二糶、厚さ〇・四耗の瓦形をしているが（何論文）、その瓦のような形について、仁井田氏は宋、程大昌の演繁露六「鉄券」に基づき（演繁露は唐、辛齊靈の玉堂新制を引く）、

それによると、やはり鉄質金字のものであつて、形は正円、その内側を空にし、外側に鉄券文を刻し、古の伝別の如く、その器を中分して一は官に蔵し一は功臣に頒つものであつて、鉄券の形が半甌の様なのはその為であり、鉄質なのは功を堅久に録するの義にとるものといふ

と指摘されている（伝は、割符、甌<sup>さう</sup>は、こしき）。鉄券には、本人や子孫の罪死を免ずる条がある所から、免死金牌などとも俗称される。

2 買地鉄券は、鉄券を呼び名とする、土地売買文書のことである。その近代的な研究は、仁井田陸氏『中国法制史研究』取引法一部二章「漢魏六朝の土地売買文書」に始まり、仁井田氏はそこで、二十七点の資料を上げられた。鉄券と呼ばれるが、その材質は、鉄に限られる訳ではなく、木や紙の他に玉、鉛、甌、石などの多岐に亘る。また、形状も一定せず、例えば鉛券などは、短冊の形を基本とし、甌券の中には、瓦の形をした、瓦券と称されるものがあつて上述、1 伝世鉄券との関連を思わせるのである。さらに

氏が、鉄券に見える「筭」字に關し、「合同」「大吉」などの、「文字を記した中央から左右に分つて両契とし、売買両当事者が左右の一通ずつを所持することとするものである」（41頁）と言われることは前引、1 伝世鉄券が「一種の割符であ」ることと、密接に關わっている。<sup>③</sup>取り分け、鉄券の如律令文言に表われる、「官有政、民私无<sup>（无私）</sup>」、「官有政法、人從私契」、「官有政法、不取私約」等の句は（41、41頁）、郭巨物語の天言b c 成立の直接的契機をなすものとして、天言aと關わる「如天帝律令」などと共に（41、41頁）、看過し難いものがあり、今後のさらなる検討が俟たれよう。<sup>④</sup>

3 随葬鉄券は、今般の何論文が明らかとした、新たな鉄券の概念である。鉄券の研究は、仁井田氏の後も一層の深化を遂げてゆくが、<sup>⑤</sup>1 伝世鉄券や2 買地鉄券は、そもそも地中に埋めるものではないので、郭巨物語における、土中から出現した鉄券と、従来の鉄券の概念とは、今一つ噛み合う所がなかった。早く仁井田氏も、「冢地から発見され」「冢地に埋めたもの」としての墓田売買文書や（406頁）、それが「土地の売主は必ずしも現実の人ではなく、信仰上の土地支配者（仁井田氏は、それを「土神」と呼ばれている）」を売主とするものがしばしば存すること」（431頁）、「土地の売主を、東王公・西王母とするものがある」こと

（呉黄武四（二二五）年十一月鉄券。431頁）、さらに「もし将来買った地について問題が生じた時は天帝に、宅については土伯にといはかる（詢）べし。東王公西王母を売買契約の任知者とする云々」というものや（晋咸康四（三三八）年二月鉄券。434頁）、「任知者」に東王公・西王母（同上）、「時知者」に東皇父・西王母、「任者」に列仙伝に見る王子橋などのように、神仙らをもつてあてている」ものがあること（宋元嘉九（四三二）年十一月鉄券。447頁）に留意されていたが、それらは全て、2買地鉄券として一括されていた側面が、問題を分かりにくくしていたのである。そのような研究状況下、石函を伴って専ら土中へ埋められることを原則とする、3随葬鉄券という概念の存在を確立した、何論文の学術的意義は甚だ大きい。

何論文はまず、隋唐墓からよく出土する、3随葬鉄券の大きさを、縦二、三十糎、横十糎前後、厚さ一糎足らずの長方形のものと規定する。また、朱書されたものや、蓋頂式の石函を伴うものがあることは、前に触れた。そして、北宋官撰の宅葬書、地理新書十四「斬草忌竜虎符入墓年月」の、

・斬草者、断へ音短へ惡鬼、安亡魂也。鬼律云、葬不斬草、買地不立券者、名曰盜葬、大凶……凡斬草日、不宜与葬月同。凡斬草日、必丹書鉄券埋地

心……公侯已下皆須鉄券二へ長闊如祭板、朱書其文、置於黃帝位前。其一埋於明堂位心、其一置穴中柩前埋之

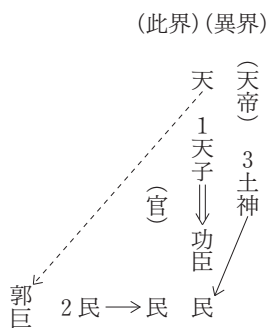
・両券背上書合同字……用鉄為地券

と言う記述を引いて、3随葬鉄券は当時、民間に流行した斬葬儀に則ることを明らかにすると同時に（何氏は、隋の陶智洪鉄券の「（大業六（六一〇）年二月二十一日）斬草」とある記載を上げられる）、それは、新葬儀において、朱書され、二つに分けられるなどと説かれた、鉄券と一致している所から、1伝世鉄券の形制を受け、2買地鉄券の体裁を借りた、喪葬目的の「買地立券」（地理新書）、即ち、3随葬鉄券であろうと論断されたのである。さて、ここに、郭巨物語の鉄券の、土中から出現した理由が、判然とする。3随葬鉄券は、随葬される物だったからであり、その二つの鉄券は、共に土中にあるべき物だったからである（地理新書「其一埋於明堂位心、其一置穴中柩前埋之」。そして、隋唐に流行した、3随葬鉄券は、漢魏六朝時代の2買地鉄券の内、例えば仁井田氏の指摘した、墓田売買文書の系譜に連なるものであることは、全く疑う余地がない。ここで、郭巨物語における鉄券の由来を検討すべく、上記1―3の鉄券の内容を、その天言a―cを用いて纏めてみたい。まず、1伝世鉄券は、天の子としての天子から、

功臣に下賜されるものである。次に、2 買地鉄券は、仁井田氏が「私人間の契約書」とされたように（404頁）、民と民との契約を表わすものである。3 随葬鉄券は、溯って漢魏六朝期の墓田売買文書で言うなら、売主が単なる民ではなく、仁井田氏の言う土神、即ち、民間「信仰上の土地支配者」であることが、一風変わっている（401頁）。つまりその売主は、此界（この世）のものでなく、言わば異界のものとなるのである。一方、買主の方も、それを墓主とするものとなる（施主なら、此界）。そして、墓田の売主である、天帝配下の土神が、この世のものでなく、冥界（異界）の土地支配者であることが、墓域への悪鬼の侵害を防ぎ、亡魂がそこで安らぐことを可能とする（地理新書）、所以となっていることがよく分かる。今、1—3の鉄券（1 伝世鉄券、2 買地鉄券、3 随葬鉄券）と郭巨の鉄券との関係を、概念図として示せば、図二十一のようになるだろう（……）。天の左が此界（この世）、右が異界となる。↓は下賜、→は売買を表わす。まず郭巨の鉄券は、1 伝世鉄券を踏襲し、天から下賜されたものである。しかし、その鉄券は、天子からでなく、天子を越えてその上にある、天から直接、下賜されている点が興味深い。このことは、天言aが天から民（郭巨）への宣誓であること

を意味しており、物語上、天子はむしろ官の一部とイメージされていることを表わしている。即ち、郭巨の鉄券（及び、黄金の釜）は、此界（この世）のものでなく、天から下賜された物であり、例え天子であっても、

そこに介入することは許されないのである（b）。そして、郭巨の鉄券は、その下賜関係を、3 随葬鉄券に借りている。3 で言えば、鉄券によって、異界の土神から民への墓田下賜となる所を、鉄券による、土神の上位の天帝から民（郭巨）への、直接的な黄金の釜の下賜とする。さらに、そのことが、鉄券及び、黄金の釜の土中から出現する、根本的な理由となっている。1 伝世鉄券を踏襲しつつ、その鉄券と黄金の釜は、此界の天子から下賜されるものでなく、言わば異界の天から下賜された物だったから、詮ずる所、それらは地から湧くか、天から降るしか、道がなかったのである（14）呉氏蔵翟門生石床の郭巨図Bを見ると実際、黄金



図二十一 1—3の鉄券と郭巨の鉄券



の釜が天から降っていてへ上には天女が描かれる、妻がそれを仰ぎ見、驚いている例がある。上記拙稿Ⅳ版図三右、図九(B参照)。また、鉄券の拝領者が、1の切臣や(3)の墓主でなく、生きた民の郭巨である点こそは、2買地鉄券における、民↓民の契約に倣うものであることは、言うまでもないことだろう。即ち、郭巨物語の鉄券は、

#### 1 伝世鉄券の下賜関係

#### 2 買地鉄券の、民↓民の契約関係

3 随葬鉄券の、売主を異界の土神とすること  
など、1—3の鉄券における、制度的な下賜及び、契約関係というものを巧みに組み合わせ、就中、1伝世鉄券における、

#### 1 天子↓功臣

という下賜関係の上下を、天子のさらに上の天から、最下の民の郭巨へと拡張して、仮構されたものであることが知られよう。このようにして組み立てられた鉄券の役割は、天から郭巨に下賜された、黄金の釜の領有権に対する、天子を含む官であれ、民(人、私)であれ、あらゆる方面からの異議申し立てを、予め封殺することに外ならない。人の土地から掘り出した黄金の釜を、郭巨が自分のものとするためには、それだけの仕掛けが必要だったのである。郭巨物語は、文学の所産であり、その鉄券もまた、仮構の一

部である。しかし、その鉄券の背後に、当時の複雑な社会制度、風俗のあったことを知るのも、文学研究の責務に違いない。

## 六

図二十二は上記、1伝世鉄券の稀少な遺品、錢鏐鉄券を掲げたものである。<sup>⑧</sup>さて、図十九の本石脚、郭巨図Cの中央に描かれた前述、瓦のような形をしているものは、黄金の釜ではなく、鉄券に違いない。そして、それは、図二十二と同じ型の鉄券であろうと考えられる。現存する唐代以前の1伝世鉄券の遺品例は、纔かに図二十二の錢鏐鉄券の一例が知られるのみに過ぎないが、1伝世鉄券自体は唐代、大量に頒賜された事実が明らかにされており、且つ、その起源と伝流は、遥かに漢代にまで溯る歴史を有している。このことから、図十九に描かれた鉄券及び、その形は、唐代の錢鏐鉄券と同型のそれが、溯って北魏時代にも行われていたことを示す、大変貴重な証拠となるだろう。さて、図十九(郭巨図C)に続く、図十(郭巨図D)に見える天言(図十四)、

<sup>a</sup>天賜<sup>a</sup>黄金<sup>a</sup>釜。官不<sup>b</sup>(得)奪、民不<sup>c</sup>(得)取

は、図十九の鉄券の表面(凸面)に記されたものであり、黄金の釜の上にそれが描かれていることは(恰も釜から伸



図二十二 錢鏐鉄券

びた二本の手が、鉄券を捧げているように見える。手足のあるその黄金の釜は、(3)ミネアポリス美術館蔵北魏石棺のそれに酷似する(図二十三)、鉄券が元来、その上に添えられていたことを表わすものである。図十九の鉄券の上に描かれているのは、黄金とも解釈出来るが(図二十三参照)、鉄券の上に黄金が来るのも不可解で(鉄券の向こうに、釜の一部が描かれるか)、黄金の光であろうと思われる。よく似た黄金の釜の光が、(14)呉氏蔵翟門生石床Bや、(15)ヴァージニア美術館蔵北魏石床の郭巨図に見えている(図二十四、図二十五)。一方、(13)呉氏蔵郭巨石脚B(図十五)に見える、釜の口に添えられた鉄券が、同F(図十一、図十二)に見える、官人の捧げ持った鉄券であることは、前述の如くだが、図十二の官人の持ったそれが、二枚となつてゐることは、鉄券というものが元来、二枚作成されるものであることを考え併せれば、容易に説明の付く事柄である。図十二における、二枚目の鉄券は、おそらく一枚目のそれが出現した時に(図十五)、朝廷の宗廟(漢書)等に、同時に出現したものだらう。繰り返すが、北魏以前の郭巨物語は、淘汰されスリム化してしまつた、今日のそれからは想像し難い程、起伏に富んだ複雑な物語であつたらしい。⑦官の黄金返還(大団円?)の場面をめぐる、例えば図十(本石脚)や図十一(郭巨石脚)、図十三(19)



図二十五 (15)黄金の  
釜の光



図二十四 (14B)黄金の  
釜の光



図二十三 (3)黄金の釜

などは、そのことを如実に示す、北魏時代の一級資料と言えるだろう。郭巨物語は余程、人気のあったものと見え、その分、遺品の数も膨大である。一方、テキスト面も同様である。中で、極めて簡略な形ながら前掲、蒙求や二十四孝などに、⑦官の黄金返還(大団円2)の中核を成す、図十四の天言abcが記述されていることは、なお注目すべきことだろう。何故なら、それらは、幼学に外ならず、郭巨物語の流布と図像制作の、原動力と見做されるものだからである。孝子伝と孝子伝図は、その幼学によって形成され、変貌させられてゆく。本石脚(20)や(13)呉氏蔵郭巨石脚、(19)呉氏蔵崑崙石床など、近時知られるに到った、新たな郭巨図から、その物語を復元してみると、例えばそれが、二つのプロローグ(①分財、②供養へプロローグ)と、二つの大団円(⑥供養へ大団円1、⑦官の黄金返還へ大団円2)を持つことなどは、その変貌の過程を逆に辿ってゆくことにより、始めて判明した事柄である。プロローグと大団円を一つの枠と捉えるならば、原初の郭巨物語は、二つの枠組みを持つものだった。そして、変貌の結果、言わば外側の枠に当たる、第一の枠が取り外され消えていった。それが両孝子伝等、今に残る、殆どの郭巨物語の形である。

図十七は、(13)呉氏蔵郭巨石脚Aを示したもので、今般①

分財の場面と認定した図像に当たり、二つの枠組みの内、

プロローグの方の第一に該当する、目下唯一の貴重な資料である。二つのプロローグは、①分財から②供養（プロローグ）へと続き、例えば図十七の左端部分が、②とも見られようことは、先にも触れた如くである。その左端を見ると、屋内に郭巨の母と子供が坐っている。考えてみると、郭巨物語の冒頭を描いた①分財の場面に、早くも郭巨の子供が登場するのは、聊か不審なことではないか。しかもその子供が抱かれておらず、坐っている所を見ると、子供は生まれたばかりの子供ではなく、何歳かの子供でなければならぬ。さて、このことは、二つのプロローグ（①分財、②供養（プロローグ）の場面と、どのように関わっているものであろうか。最後に、郭巨の子供をめぐる、②供養（プロローグ）の場面の問題を、少し検討しておきたい。

郭巨は、自分の子供を生き埋めにしようとするが、その子は一体、幾つだったのか。文献の記載は、一様ではない。まず陽明本などは、「其婦忽然生一男子。便共議言」と言い、子供の年齢を記さず、単純に解釈すれば、生まれたばかりの子供を、直ちに殺そうとしたようにも読め、この形のもの、数が多い。それに対し、例えば、

・巨有一子、年始兩歲（句道興搜神記）

・妻生一子、年三歲（敦煌本事森）

（今昔物語集）

・妻一男子<sup>チ</sup>生<sup>チ</sup>。其子漸<sup>シテ</sup>長大<sup>シテ</sup>、六、七歲<sup>ニ</sup>成<sup>ル</sup>程<sup>ニ</sup>など、子供の年を二才、三才、六才、七才とするものもある<sup>⑥</sup>（蒙求、二十四孝も三歳）。従って、現存の孝子伝テキストから、殺されかけた子供の年齢を確定することは、殆ど不可能とすべきである。常識的に考えるなら、乳飲<sup>ちのみ</sup>子段階の郭巨の子供が、直ちに母の食事の量に関わると思われなから、子供の食事が母のそれと関わってくるのは、子供が乳離<sup>ちばな</sup>れ<sup>シテ</sup>からのことであろう（J・クリーマー氏<sup>⑦</sup> 教示）。ところで、郭巨の子供は、図像面では、どのように描かれているか。意外なことに、例えば②供養（プロローグ）とした、(2) A、(14) A、(20) A（本石脚。図十八）の三図全てに、その子供が登場している（但し、(2) Aは、不明）。そして、(20) Aの子供は、抱かれ、(14) Aの子供は、坐っているという、二通りの子供の姿が確認される。さらに③道行の場面になると、(2) B、(13) C、(20) B（本石脚。図八）の三図中、後二者の子供は、立って歩いている（(2) Bは、不明）。続く④穴掘り、黄金は、郭巨図を代表する象徴的な場面であって、全十六図の多きを数えるが、暫く不明の三図を除き（1、2 C、6 A）、抱かれる子供の図像が、十三図中の十一図に及ぶ。例外的なのは、(14) Bと(15)の二図で、前者の子供は坐っていて、後者は立っている。⑤



運搬の場面を見ると、全五図中の二図には、子供が見えず  
(2) B、(13) D)、残る二図の子供は抱かれ (4) B、(5) B)、  
一図の子供は立っている (歩いている (19) A)。⑥ 供養  
(大団円 I) の場面では、全十図の内、子供不見の三図を  
除き (4) C、(6) B、(11)、抱かれた一図を例外として (5)  
C)、六図全ての子供が坐っている。(7) 官の黄金返還 (大  
団円 2) の全三図には、子供が描かれておらず (13) F は、  
描き止すか)、⑧ 丑祠の図像の子供は、坐っている (16) B。  
以上の全二十遺品において、郭巨の子供が、立っている  
(歩いている) ないし、坐っている画像を含むものは、

(3)、(7)、(12) B、(13) A C E、(14) A B、(15)、(16) B、(19) A B、  
(20) B

の九遺品となる。そして、乳飲子が立ったり歩いたり、ま  
た、坐ったりすることは、基本的に不可能だから、上記九  
遺品の子供は、乳飲子でなく、既に乳離れして、物を食べ  
るようになり、母の食を奪うようになったことが、含意さ  
れているに違いない。すると、郭巨は、生まれた子供を、  
直ちに殺そうと考えた訳でなく、乳離れするまでの間は、  
子供を育てたことになる。また、郭巨は、その間も、母へ  
の供養を怠らなかつたことだろう。実は、この問題が、②  
供養 (プロローグ) の場面の内容と関わって来るのである。  
① 分財を描く、図十七 (13) A) を改めて検討してみよう。

その左端の屋内には、母と子供が坐っていた。図十七を単  
純に一図と捉えてしまえば、郭巨には、分財の時点で子供  
がいたことになり、しかも、その子は、既に乳離れしてい  
たことになるだろう。しかし、そのようなことは、分財を  
記す、

・ 居有頃、妻産男 (二十卷本搜神記)

・ 共推与之居無禍患。妻産男 (劉向孝子図)

等のテキストから考えて、あり得ない場面としなければな  
らない。その子供は、明らかに分財の後に生まれているか  
らである。一方、(13) A は、直ちに④ 穴掘り、黄金の B の場  
面に続いてゆくため (或いは、③ 道行の C の場面)、(13) に  
は② 供養 (プロローグ) の場面が見当たらず、このことか  
ら、図十七の左端は、その② 供養 (プロローグ) の場面を、  
兼ねたものと見做すべきである。加えて、なお腑に落ちな  
いのが、図十七の子供が坐っている点である。

現存する② 供養 (プロローグ) の三図全てに、子供が描  
かれていることは、前述した (2) A は、不明)。その内、  
(14) A の子供は、やはり坐っているが、(20) A (本石脚 A。図  
十八) の子供は、郭巨の母に抱かれていた。今、その図十  
八を、例えば、

郭巨家貧養老母。妻生一子。三歳 (古注蒙求)

の——線部に当たると考えると、図十七の左や (14) A は、

——線部に当たるものとなるだろう。即ち、同じ②供養（プロローグ）の場面ながら、図十八は、子供が誕生した場面、図十七左や④Aは、後にその子が成長し、母の生活を脅かすようになって、④穴掘り、黄金の場面を呼び起こす、より緊迫した場面と見做される。すると、②供養（プロローグ）の場面において将来的に、相異なる二つの場面内容を、区別する必要がある。②供養（プロローグ）場面のさらに厄介な問題は、上記古注蒙求の本文で言えば、——線部と——線部に先立つ、——線部に該当する図像が、本来の②供養（プロローグ）の場面と想定されるにも関わらず、目下管見に入らないことである。

以上、新出の本石脚の紹介を兼ねつつ、その右半の郭巨図と⑬呉氏蔵郭巨石脚との関連を中心に、それらの基となった北魏時代の郭巨の物語の形を考えてみた。そこから推定される、北魏以前の郭巨物語テキストの形というのは、現存する本文群の枠を大きく越えてしまう所から、現存する郭巨物語の文献テキストの限界を、具体的に浮き彫りとする。例えば本石脚や⑬の郭巨図を、単独で説明出来るような本文は、目下現存せず、いずれも何らかの省略が想定される点、図像は、それぞれの遺品の構図形成の足跡を、孝子伝図の研究史へ残すと共に（表二）、時間の中で淘汰

されて行つた、物語本文の形成史というものの検討を、改めて私達に要請するのである。近年かつて例のない、孝子伝図としての郭巨図の充実は、テキスト研究の未来に一筋の光明を齎すと共に、物語本文の復元が、必須となることを示唆している。例えば場面一覧①—⑧などは、その第一歩であり、今後のさらなる図像の出現に期待しつつ、いずれ郭巨物語の復元に取り組みたく思う。

付記 貴重な郭巨董黯石脚の撮影を許して下さった大同北朝芸術博物館、また、その拓本を始めとする、貴重な資料の数々を提供して下さった呉強華氏に対し、心から御礼申し上げたい。小稿は、深圳市金石芸術博物館による北朝文化研究事業の一環である。

#### 注

- ① 図一は、大同北朝芸術研究院『北朝芸術研究院藏品図録石雕』（文物出版社、二〇一六年）図版19に拠る。
- ② 図二は、注①前掲書図版18に拠る。
- ③ 図三は、呉氏提供の拓本の写真に拠る（図十一、十二、十五、十七も同じ）
- ④ 拙稿「郭巨図攷—呉強華氏蔵北魏石床脚部の孝子伝図について」（『佛教大学文学部論集』98、平成26年3月）
- ⑤ 図版一—図版四は、北朝芸術博物館提供の写真に拠る。
- ⑥ 拙稿「董黯贅語—孝道と復讐（一）」（拙著『孝子伝図の研究』〈汲古書院、平成19年。初出平成14年7月〉II—3）

⑦ 拙稿Ⅱ「呉強華氏蔵新出北魏石床の孝子伝図について―陽明本孝子伝の引用―」（『京都語文』24、平成28年12月。小稿の黄盼氏による中国語訳「関于深圳博物館展陳北魏石床的孝子伝図―陽明本孝子伝的引用」が、趙超、呉強華氏「永遠の北朝深圳博物館北朝石刻芸術展」〈文物出版社、二〇一六年〉に収められる。

⑧ 拙稿Ⅲ「董黯図攷―呉氏蔵北魏石床（二面）の孝子伝図について―」（『佛教大学文学部論集』100、平成28年3月）

⑨ 拙稿Ⅳ「呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―翟門生石床の孝子伝図―」（『佛教大学文学部論集』101、平成29年3月）

⑩ 拙稿Ⅴ「董黯図攷（二）―呉氏蔵董黯石床の出現―」（『佛教大学文学部論集』102、平成30年3月）

⑪ 拙稿Ⅵ「呉氏蔵新出董黯石床Bについて」（『佛教大学文学部論集』103、平成31年3月予定）

⑫ 拙稿Ⅶ「董黯覚書―董黯画卷の復元―」（近刊予定）

⑬ 図六、図七は、呉氏提供の拓本写真に拠る。

⑭ 諸孝子伝における、郭巨の記述を比較検討した労作として、中島和歌子氏「四系統の孝子伝・郭巨説話をめぐって―中古・中世の受容も含めて―」（『語学文学』39、北海道教育大学語学文学会、平成13年3月）

⑮ 陽明本、船橋本孝子伝の本文は、幼学の会『孝子伝注解』（汲古書院、平成15年）による。

⑯ 図八は、呉氏提供の拓本写真に拠る（図十、図十八、図十九も同じ）。

⑰ 13C（また、2B）の図像については、注④前掲拙稿図三、図十二（図八）を参照されたい。

⑱ 図九は、和泉市久保惣記念美術館提供の写真に拠る。当石床

については、和泉市久保惣記念美術館『北魏棺床の研究 和泉市久保惣記念美術館 石造 人物神獸図棺床研究』（和泉市久保惣記念美術館、平成18年）を参照されたい。

⑲ 西野貞治氏「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について」（『人文研究』7・6、昭和31年7月）36頁（また、同氏「董永伝説について」（『人文研究』6・6、昭和30年7月）68頁）

⑳ 孝子伝と誤解された類書事森については、拙著『孝子伝の研究』（佛教大学鷹陵文化叢書5、思文閣出版、平成13年）I 13参照。

㉑ 敦煌本藏金仁孝篇二十九にも、「其妻不能逆意、遂共入後園」（P・二五三七）などある（後掲注㉒参照）。なお（Ⅰ）の題記中にも、「共妻抱児、将向田中」（注㉒前掲拙稿Ⅱ

二参照）、また、三教指帰成安注所引逸名孝子伝にも、「乃令其妻抱児」（注㉒前掲拙稿Ⅲ237、375頁参照）など見える。また、岩波新日本古典文学大系34の注二〇（179頁）に、「鋤」は注好選にみえる。孝子伝（両孝子伝等）なし」と指摘された前引今昔の、「我鋤持」についても、例えば敦煌本事森に、「巨自執鋤」と見えることに注意すべきである（変文系断簡S・三八九vにも、「巨自将鋤鏹」）。

㉒ 注④前掲拙稿

㉓ 図十三は、呉氏提供の拓本写真に拠る。なお呉氏蔵北魏崑崙石床の郭巨図については、上記拙稿Ⅳ参照。

㉔ 例えば句道興搜神記に見える、

官不得奪、私不得取

句には、種々の形があつて、当句の主な異同を示せば、次の通りである。まず変文系断簡S三八九vは、第一句「奪」を、

「侵」に作る（敦煌本藏金は、「取」）。次いで、敦煌本北堂書鈔体甲は、第二句「私」を、「民」に作る（後掲注②参照。蒙求注「古注、準古注、新注」は、「人」）。敦煌本事森は、第二句「得取」を、「許侵」に作る（変文系断簡は、「許取」。敦煌本藏金は、「得侵」）。後述二十四孝の当句の異同については、注②参照。

②⑤ 図十六は、固原博物館提供の写真に拠る。なお寧夏固原北魏墓漆棺画については、近稿「寧夏固原北魏墓漆棺画の孝子伝図」を予定する（中国語版が近刊予定）。

②⑥ 二十四孝については、注②前掲拙著Ⅰ二参照。なお当句、竈大本は、「人」を「民」に作る。日記故事系は、「奪」を「取」に、「人」を「民」に、「取」を「奪」に作る。孝行録系は、身延文庫本全相二十四孝詩選に同じ。

②⑦ さらに二点の敦煌文書を紹介しておく。一つは、北堂書鈔体甲（P・二五〇二）、もう一つは、藏金二仁孝篇二十九（P・二五三七）である。前者は、かつて羅振玉が民国六（一九一七）年に、『鳴沙石室古籍叢残』中に古類書鈔体甲の一として影印したもので（下半を失う。現在は北堂書鈔体甲と呼ばれる）、「劉向孝子（図）」を引く。共に当句が見え、劉向孝子図にも、当句を有するヴァージョンのあったらしいことが分かる。

#### ・北堂書鈔体甲

郭巨埋<sub>レ</sub>子、地出黄金。劉向孝子□

無食、供養老母。巨生一子、遂奪母□

食、恐母命不存濟、遂共妻和顏□

地為坑、遂得黄金一釜。鉄券一枚□

得奪、民不得取。為巨孝行、故得□

#### ・藏金

漢郭巨、母<sub>（子）</sub>老家貧。每求乞、以買<sub>（子）</sub>甘脆、供<sub>（子）</sub>於親<sub>（子）</sub>也。巨有<sub>（子）</sub>二字、巨憐<sub>（子）</sub>之、嘗分<sub>（子）</sub>食飼<sub>（子）</sub>之。巨見<sub>（子）</sub>老母形容漸瘦、巨謂<sub>（子）</sub>妻曰、天荒人飢、所得甘美、被<sub>（子）</sub>子分<sub>（子）</sub>之。令<sub>（子）</sub>母瘦弱、非<sub>（子）</sub>孝子<sub>（子）</sub>也。親即難<sub>（子）</sub>得<sub>（子）</sub>、子可<sub>（子）</sub>有也。与<sub>（子）</sub>汝將<sub>（子）</sub>兒埋<sub>（子）</sub>之。其妻不<sub>（子）</sub>能<sub>（子）</sub>逆意、遂共入<sub>（子）</sub>後園、深掘<sub>（子）</sub>二坑、乃得黄金一釜。上云、天賜孝子郭巨之金。官不<sub>（子）</sub>得<sub>（子）</sub>取、私不<sub>（子）</sub>得<sub>（子）</sub>侵。

②⑧ 搜神記における孝子説話を論じたものに、大橋由治『「搜神記」研究』（明徳出版社、平成26年）四章がある。

②⑨ 大島建彦氏校注、訳『二十四孝』（日本古典文学全集36『御伽草子集』所収、小学館、昭和49年）頭注一一（323頁）。田真物語については、注②前掲拙著Ⅲ三参照。

③⑩ 橋本草子氏「郭巨」説話の成立をめぐる（『野草』71、平成15年2月）は、郭巨説話の成立が南北朝以降である可能性を指摘するが、分財をプロローグとする郭巨物語は、橋本説とは逆に、その成立を漢代へ溯らせるものとなる。

③⑪ 注④前掲拙稿

③⑫ 例えば池上洵一氏訳注『今昔物語集10』（東洋文庫383、平凡社、昭和55年）当該話の注五（6頁）にも、

蓋がついていたことは、どの類話にも見えないとされている。訝しいのは、旧大系も搜神記を参照している点である（頭注二三の続きに、「搜神記」「丹書」とある。搜神記の本文は、早く『攷証今昔物語集』に全文が引かれている）。この蓋のことがはつきりしないため、例えば池上氏の現代語訳における、

その蓋を開けて見ると、釜に文字が記してあり（前掲書4頁）



など、例の天言の記されていた場所についての混乱が生じることになる。「石蓋（搜神記）」のことは、後世のものながら、二十四孝の孝行録系、七言詩注本「郭巨埋子」にも、  
有「石蓋」、其下金有釜。彼石蓋上文字在。

と見え、それによると、例の天言は、石蓋に記されていたことになる。

③③ 何月馨氏「隋唐墓葬出土鉄券考」（『考古』18・2）

③④ 図二十は、何氏注③前掲論文、図三一に拠る。函蓋表の「鉄券函」「卷函」等の刻銘については、同図四1、2を参照されたい。

③⑤ 仁井田陞氏「唐宋法律文書の研究」（東方文化学院東京研究所、昭和12年）三編第二章「鉄券」

③⑥ 楊琳氏「丹書鉄券的左右問題」（『古典文学知識』13・2）

③⑦ 仁井田氏注③前掲書

③⑧ 仁井田陞氏『中国法制史研究』土地法取引法（東京大学東洋文化研究所、昭和35年）取引法一部二章。買地鉄券（買地券）の研究史その他については、拙稿「長恨歌の上窮碧落下黄泉と買地券」（『白居易研究年報』19予定）に述べたので、参照されたい。

③⑨ 仁井田氏は、「合同」字の右半の記される例として五代南漢、大宝五（九六二）年十月鉄券（452頁）を上げ、何月馨氏も、左半の記される実例として、湖北孝感大湾吉北宋墓出土鉄券を上げられている。

④① 仁井田氏が、鉄券における売買の目的物を論じ、鉄券が「土地売買文書である以上は、売買の目的物が土地であることはいうまでもないが、なお一考すべき問題がある」として、

それは漢代の土地売買契約によると、土地に生えている草

木の類および土地のなかに宿蔵する財物は、土地とともに、単一な権利の客体と考えられ、土地と不可分の一体として、売主から買主の手に移転されたものである

と指摘されることも重要である。何故なら、土中の埋蔵品は、その土地の買主即ち、地主のものとなるからで、例えば郭巨の掘り出した黄金の釜は、そのままでは郭巨の所有物とはならないからである。このことが天言abcの要請される理由であることが、改めて確認される。

④② 吳天穎氏「漢代買地券考」（『考古学報』82・1）、王志高氏「六朝買地券綜述」（『東南文化』96・2）、魯西奇氏『中国古代理買地券研究』（厦門大学出版社、14年）など。

④③ 赤松子、東方朔などを証見人とするものもある（五代南漢、大宝五年十月鉄券。458頁注（43））。

④④ 図二十二は、寧波博物館、中国国家博物館『国家宝藏 中国国家博物館典藏珍品展』（科学出版社、二〇一〇年）金書鉄券（174、175頁）に拠る。

④⑤ 仁井田氏注③前掲書、洪海安氏「唐代頒賜鉄券問題研究」（『陝西師範大学学报（哲学社会科学版）』39・5 10年9月）

④⑥ 図二十三は、ミネアポリス美術館提供の写真に拠る。

④⑦ 図二十四は、吳氏提供の拓本写真、図二十五は Gisele Croës, Ritual Object and Early Buddhist Art (New York, 2004), Stone funerary bed A3に拠る。

④⑧ 中島氏注④前掲論文、表1参照。